

---

# 司馬懿仲達の憂鬱

堕落論

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

司馬懿仲達の憂鬱

### 【Zコード】

Z2154Y

### 【作者名】

堕落論

### 【あらすじ】

司馬田尚志しまだひさし

司馬田尚志は冴えない中年オタ、離婚届を提出した帰りに普通じゃない事故に巻き込まれてしまい死を迎えるが、その普通じゃない事故の張本人によつて自分が書いていた二次小説の元になる世界に転生させられてしまう。

自分が知つているゲームとは微妙に違つてゐる世界……でも自分が知つているキャラ達は多数登場する世界……姿は若者、精神は親爺の主人公の明日はどうちだ

## プロローグ（前書き）

この小説はオリキャラ主人公&筆者の観念世界での話と書つ事で、その辺りが苦手の方はご遠慮して頂いた方が良いかとは思われます。それでも良いよ。という優しい方はお目汚しかとは思われますが付き合いくださいませ。

御批評、苦言応援等ごぞこましたらどんどん頂けたら幸いです。皆様からのコメントが筆者の成長につながります。では拙い物ではございますが宜しくです。

## プロローグ

「司馬田さあ～ん、司馬田尚志さあ～ん……」

事務的な声が部屋に響く。「こはうどんで有名な某地方都市の市庁舎の市民課である。

司馬田と呼ばれた男は年齢は40半ばであろうか、くたびれたスース姿で、何処か人生に疲れたと言う表情で先程名前を呼ばれた窓口に向かい、係りの者から書類の様な物を受け取る。

受け取った書類を、これも書類発行の際の料金を払う時に一緒に受け取つた市庁舎の名前入りの封筒に入れながら、彼は一階ロビーを通り抜け玄関から外に出る。

市庁舎から退出し駐車場に置いてあつた車に乗り込みネクタイを緩めると車を発進させた。

「はあ～っ……」

市庁舎前の交差点で信号に捕まつた彼は大きな溜息を一つ吐き、カーステレオのCDトレイから半分ほど顔を出しているCDにチヨンと触れた。少しの間をおいてカーステレオからはいつも好んで聴いている80年代ポップスが流れ出した。

「婚姻届を出した時も思つたんですが、紙切れ一枚で簡単に家族になつたり他人になつたり出来るもんなんですねえ……」

青信号を確認し、まるで誰かに話しかけるかの様に独り言を呟きな

がら車を発進させる。

「さて……離婚届は受理されましたし後は午後から家裁で子供達との面談の日取りと養育費の相談ですか……どうせあちらは弁護士さんのみの出席でしょうから……気が重いですねえ……」

今日は休日となっている自分の職場に向かいながら、車を走らせている途中に建つていてる地方裁判所を横目で見て心底ダルそうな口調で、また独り言を呟いた。

車内で今後の事を考えながら胸元から取り出したセブンスターに火を点けようとした時に、突然車のフロントガラス一杯に真っ白な鳥の羽根の様なものが拡がつて視界を覆つ。

「へつ……？ 何なんですか……？」

驚愕で素つ頓狂な声を出した身に次に起こつた事は、ドスンと何かが車のボンネットに落ちて来たかのような感覚

「えつ？ エエツ……？ うわあつ！…」

そして何が何だか分からずに、真っ白な視界を振り切ろうとして慌ててハンドルを切つた直後、凄まじいまでの衝撃が彼の車を横転させる。その衝撃はシートベルトをしていなかつた彼を、いとも簡単に車外に放り出して一度二度と路面にバウンドさせる。

彼は一度田の路面との接触で頭部を強く打ち、二度田三度めの接触では、衝撃で折れた肋骨が、どの臓器かは判別出来ないが刺さったのであろう激痛に、自らの死を否が応でも理解した。

「何なんですか今は…………それより…………もう多分駄目でしょう  
ねえ……将太、愛香……」「めんなさい……お父さんは…………」

薄れ行く意識の中で子供達の事を思い浮かべる一方で、混濁する意識の中では

「ああ…………そう言えば部屋の掃除もしてませんでしたねえ……床には工口本が散乱している筈だし……パソコンも一次小説書きつ放しでシャットオフしてませんね…………」

どうでも良い様な事を考えつつ彼の意識は途絶えた。

## プロローグ（後書き）

どうも墮落論と申します。

初投稿となりますがいかがでしたでしょうか？

今後とも細々と続けて参りたいと思ひますのでどうか宜しくお願ひ致します。

## プロローグ 2 真実

「…………せんか？…………さん、…………さん」

誰かが自分に向かつて話しかけている声に反応する様に意識が徐々に戻つて来る。未だ混濁した意識ではあるが、先程自分の身に何が起こつたかはハツキリと覚えている。

(取り敢えず声が聞こえると言つ事は生きているみたいですね……体の感覚が何か変な感じですが、まああれ程の距離をフツ飛ばされればねえ……兎に角、生きて良かつたと言つ所でしょうか)

だんだんと覚醒しつつある意識で彼はそう考えた後、ゆっくりと目を開けようとした時に、いきなりハツキリと声が聞こえた。

「まあ、そう考えたいのはヤマヤマでしょうが、残念ながら貴方は既に死んでいます」

「はいっ？」

唐突に聞こえて来た声に思わずゆっくりと開けようとした目を見開き、寝たままの状態で辺りを見回す。意識の片隅で何処かの病院の一室である事を期待していたが、淡い期待を者の見事に打ち砕く様に辺りは暗闇で覆われていた。

「此処は…………何処でしょつか？」

「まあ、貴方達の世界の分かり易い言葉で言つのならば『死後の世界』ってやつですかねえ」

呆然自失となつた状態で口から出た独り言に、すぐさま答えが帰つて来た事で、もう一度だけ目の動きだけで辺りを見回してみたが、先程から答えを返してくれる者の姿は確認出来ない。

「えっとお……何から聞いたら良いのか……取り敢えず私はどうなつてるのでしょうか？」

通常時なら錯乱して喚き散らしてもおかしくない状態であると言つのに、今は現状把握を最優先するべきと考え直した結果。彼は場の空気を読んで最適な質問をした筈なのだが

「貴方……変な方ですねえ……大抵の人間は、こういう状態に陥ると著しい恐慌状態を引き起こすものなんですけどねえ……失礼ですけど貴方、生前に天然だとかズレてるとか、他人から言われてませんでしたか？」

返つて来た答えがこれである。返答の際の生前と言ひ單語が妙に生々しく感じられたが、それはこの際置いておいて、彼は微妙に痛む頭で言葉を返す。

「確かに喚き散らしたい衝動はありますが……私としては出来るだけ今現在の状況把握をしたいが為の質問のつもりだったのですが、何かおかしかつたでしょうか？」

「ふむ……良く言えば落ち着いている、或いは達觀していると言つのでしようが……未だ天然ボケの疑いを捨て去る事が出来ませんねえ……」

「何か非常に酷い事を言われていると思うのですけれど、兎に角現

状の説明をお願いできませんか？それを聞いた上で、錯乱して暴れるなり、絶望して泣き喚くなりしようつと思ひますので……」

「（やはり変な人にもかいかも……）そうですね、客観的な事實を申し上げますと、司馬田尚志さん、貴方は不幸な事故でお亡くなりになりました」

「はあ……不幸な事故ですか……」

「はい、不幸な事故です。我々の主、貴方達が神と呼び崇め奉る御方が下界に降臨された際の、ちょっととした手違いに貴方が巻き込まれた形になってしまったのです……本当に申し訳ありません」

それまで事務的に話していた声の主の口調が事故の謝罪の際には悲痛さが感じられる声に変わっている事が、これは間違なく真実の事であるひとと彼を納得させた。

「そうですか……まあ人である自分には分からぬ世界の事ではあります、主が降臨されたと言つ事は余程の大事だったのでしょうかね……」

「はあ……まあ……その……」

何故だか相手の口調が急に歯切れの悪いものとなってしまった事に、若干の嫌な気持ちを感じつつ先程より詰問口調で問つて見る。

「もう一度御聞きしますが余程の大事で貴方の主は降臨されたんですね」

「…………」

「何で無言になるんですか？」

「いやあ……あのね……大変言い難い事なのですが……今回我が主が此の地に降臨されたのは……そのお……貴方が言つ様な大事では無く……えへとですねえ……天界るるぶに掲載されている程の『さぬきうどんの店』に行く為だったんですよ……ハハハ……」

「はああああああああつ？」

事故の真実と声の主の渴いた笑い声を聞いた彼は、あらん限りの声を張り上げた後、あまりのショックの為にまたもや意識を失っていくのであった。

## プロローグ 2 真実（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』 プロローグ2をお届けいたしましたが如何だつたでしょうか？出来るだけ早くプロローグを終了させて本編に入りたいと思いますので今後ともどうか宜しくお願いします。

## プロローグ 3 提示

「…………」

(何か悪い夢を見た様な気がしますね……うん、悪い夢です。神様つてのが居るって事は良しとしましそうですがその神様がうどん食べる為に降臨するなんて……何処の『聖おにさん』設定ですか……そう、これは夢です。此処の所離婚調停等で疲れていた私が見た夢なんです。ええそろそろ決まっています)

混濁する意識の中での彼はそう考へて今度こそ本当の世界へと希望を抱きながら目を開けようとした時、

「いや、現実逃避をされるのは結構なんですが……何度氣絶されても司馬田さんが死んでいると云つ状況は変わらないですよ」

宛ら全ての希望を打ち砕くかの様な声が聞こえて来る。何とは無く理解はしていたが、改めて突き付けられた事実に対しても常な理不尽を感じて声を荒げてしまう。

「何を他人事のように仰っているんですか？そもそも貴方の主が、うどんを食べたいが為に下界に来なければ、今此処に私はいない筈じゃあないですか！！」

「まあその事に尽いては我々天界も甚だ遺憾には考へているのですが、我々は決して今回の不幸な事故を他人事などと無責任な事はちつとも思つていませんよ。それ故、事態收拾と事後協議の為に態々大天使の私自らが天界から派遣されて来たのですから、人の身でありながら光榮だと思って下さい」

「え~と……甚だ遺憾であると言つ政治家の様な答弁とか、貴方が大天使であるとか、事故の張本人である貴方方が何故上から目線なのか等、ソツコニ所は多々有るのですが…………」

「それがどうかいたしましたか?」

「言外に何か文句があるのかとでもいう雰囲気を漂わせた相手の言葉に彼は、もうどうでもよくなつてきて投げ遣り氣味に言葉を返す。

「いえ、これ以上不毛な会話を続ける事は精神衛生上良くないって事だけは理解が出来ました……で、事態收拾と事後協議と言う事ですが、結局私はこれからどうすれば良いのでしょうか?」

「ほう、御理解が頂けたようで幸いです……もう少し錯乱状態で抵抗を示すかと思っていたのですが……司馬田さんって、やはり少し人としてズレていませんか?」

「貴方は話を纏めに来たのか、私の事をからかいに来たのかをハッキリとさせた方が相互理解の為に宜しいのではないかと思いますが

……」

「いやいや、これは失礼致しました。でも突発的な事故でお亡くなリになつたのに、此処まで冷静な方は本当に珍しいんですよ……まあそれはさて置き本題に入りましょうか」

「やつとですか……あんまり前フリ長いとUU読者にソツポ向かれてしますよ」

「ハイ、其処の死人、メタ発言禁止!!」

「何で天界の大天使とやらがメタ発言なんて言葉知ってるんですか  
つー!?」

「まあ、近頃の天界は何でもアリですからね……と、言ひ訳で本題  
に入ります。突然ですが貴方には転生して貰います」

「はいいつ？」

「転生ですよ。テ・ン・セ・イ。分かりますか？ 転生！！ 貴方  
が望んだ世界に転生して頂いて、我々天界が付与したチート能力全  
開で「そりやあもう大騒ぎさつ、イエ～イ！」ってな具合で新しい  
人生を楽しんで貰おうと言う事で…… オケ？」

「いやいや…… オケ？ って…… そんな軽いノリで言われても、元  
の世界に生き返るって事は出来ないんですか？ 私つい最近離婚が  
成立しましたんで将太に愛香、一人の子供達の養育費も払っていか  
なければならぬんですよ……」

「ああ…… 言い難いのですが生き返るのは無理ですねえ…… だつて  
貴方の遺体はもう荼毘に付されましたし、貴方が死んだと言う事を  
かなりの人が認識しているんですよ。それらの認識を全部書き換え  
て貴方の人生を再構成するなどと言うチート創生なんて、ぶっちゃけ  
面倒くさいだけですし……」

「面倒くさいって…… そもそも貴方達の手違いでしょうが

「それについては重々申し訳ないとは思っていますが、実質貴方一  
人を生き返らせると言葉が死んでから以降に出生した新たな命を全  
て無かつた事にしなきゃいけないんですよ…… そんな悪魔の様な所

業を貴方は望むんですか?」

「ぐつ……」

「ですからここは一つ貴方に我慢して頂いて快く転生して頂けないかなあと、我々は思う次第であります……勿論転生した世界での身の安全及び快適なセカンドライフは天界が保証しますよ」

「二人の子供達の養育費は……私がそれを払えないと元妻と子供二人の生活の心配が……」

「それは無問題です!! 貴方が御子さん一人を受取人にしている生命保険ですが此方の方で手を加えておきましたので、毎月30万円程は奥さんの口座に入る様になっていますし、貴方の両親にも同額が振り込まれますよ」

「貴方方はうちの家族を全員一ートにでもするおつもりですか?」

「まあそこは天界からの誠意と言つ事で御納得を頂いて、如何でしょうか後顧の憂いも無くなつた事ですし、ここは一つ快く転生して頂けませんかねえ」

そう言つた声のトーンは大天使と言つよりは、自分が加入した生命保険のセールスレディに近いなあと、彼は現実逃避が半ば入った状態でぼんやりと考えていた。

## プロローグ 3 提示（後書き）

どうも墮落論です。

『プロローグ 3 提示』を書かせて頂きました。

次回でプロローグ終了いたします。

今後とも頑張りますので宜しくお願い致します。

## プロローグ 4 旅立ち

「はあ……何と無く釈然とはしませんが、ここは黙つて貴方の言う通りに転生した方が話が早く転がりそうですねえ……そろそろ本編に行かないと評価ポイントにも影響が出て来るでしょうし」

渋々と言つた表情で尚志は大天使が言つた転生話に了承の意を示した。

「誰に向かつて話してるか……何て事は今更なので突つ込みませんよ。それよりもその答えは転生受諾と捉えても宜しいのですね」

「ええ、どのみち一度と子供達に逢う事が出来ないのであれば、この世界に未練は無いですからね……ところで私はどう言つた世界に転生させられるのですか？ 先程の話ではチート能力の附加と身の安全は保障されると言われてましたが……」

「はい、我々天界が貴方の望む様な「俺様、Tueeeeeee！」的な力を付与しますので、貴方自身が死ぬ羽目になる様な事は余程の事が無い限り発生しませんよ。それでどの様なチートを御望みでしようか？」

「どの様な……と、言われましても、行く先が何処か分からなければ、能力の御願の仕様が無いじゃありませんか」

「ああ、それもそうですねえ……ではお教えしましょう。今回貴方が転生して頂く世界は……ズバリ『真・恋姫十無双』の世界です。どうです嬉しいでしょ？ヒューヒュー」

大天使と名乗る声は、そつまつと頭の悪いアイドル同会者の様に囃し立てる。

「あのね……」

「ん？ 如何しました？ 何か転生先に御不満でもござりますか？」

「いや……不満と言つよりは、何故に『真・恋姫十無双』の世界……なんでしょうか？」

「え っ、だつて貴方の事を知る為に部屋を見に行かした織天使から報告では、貴方の机上には恋姫のエロゲーに三国志関連の資料が散乱し、床には恋姫関連の同人誌、それに何よりもPCには貴方ぐらいいの年齢の方が書くには、相当痛くてキモイ一次小説が書きかけのまままだそうじやないですか」

「い……い、痛くてキモイ小説……ですか」

「いやまあ、その辺りは個人の見解の相違つて奴でコメントは差し控えさせて頂きますが……」ここまでされるのであれば相当お好きなんだよウ、その世界が」

「あのですね……私は恋姫が好きと言つよりも、ただ単に恋姫が題目として案外書き易かつたから書いてたんですけど……」

「何ですって……では山と積まれた三国志関連の資料と床に散らばる1~8禁恋姫同人誌は？」

「まあ、いくら一次小説とは言え嘘八百は書きたくなかったので、それなりに資料は集めましたし……後、1~8禁本は……单なる

自分の性的趣向です「

最後の方で尚志の声が小さくなってしまったのは御愛嬌と言つたと  
ころか。

「おやおや、これは困りましたねえ……我々は貴方の部屋の状況から鑑みて転生先は恋姫の世界しかないと判断したので、他の転生先など用意しなかつたんですがねえ……」

「別に恋姫の世界 자체が嫌いな訳では無いですから、其処に転生させて頂ける事については否かでは無いのですが……」

「いやに奥歯にモノの挟まつた様な言い方をなさいますねえ」

「いや、先程のチート機能の件なんですがね……転生先が恋姫の世界と言うのならば、貴方方が提案された「俺様、強ええええ！…」的な要素は私的には不要かなと思つたものとして」

「その訳は……伺つても宜しいですか」

「ええ、大した訳でもありませんからね……まあ何と云つて、恋姫のどの辺りに転生させていただけるか全く分かりませんけれども乱世である事は間違いないのでしょ？」

「まあ、そうなりますねえ」

「いくら転生者と言えども転生世界の摂理を無視した様な武力は、やがて自分や周りの世界を壊して行くように思つんですよ。それなら超的な武力などよりは知力や魅力の方を私は望みます、まあ何よりも私には戦場での縦横無尽の働きなぞ出来そうに無いですか

「うね

「ふむ……まあ、それが貴方の御考えであるならば重視させて頂き  
ますが……ならば貴方に対しての付加は統率力、魅力、知力、政治  
力……後は『主の祝福』と……」

「何ですか？ その『主の祝福』ってのは……」

「ああ、これは先程からの話に出ている貴方の転生先での命の保証  
ですよ。これがあれば何があつても貴方は死ぬ事はありませんし、  
勿論、大怪我ひとつ負わずに新たな人生を送れますよ」

「ん~……」

「どうしました？ まさか貴方『主の祝福』までも要らないと言つ  
のでは無いでしょ？ 貴方がこれから転生する先は乱世なん  
ですよっ！ 貴方が考へているよりもずっと『死』と言つものが  
現実的な世界なんですよ」

「ん~……確かにそうなんでしょうがねえ……チート機能付けて貰  
つて言うのもなんですが、転生したら少しほは前向きに生きようと思  
うんですよ……それこそ日々を一生懸命にね……」

「…………」

尚志の揺るがない決意に大天使は返すべき言葉を失つてしまい、暫  
し重苦しい沈黙が辺りを支配する。どのぐらいの時間が経つたであ  
るつか、

「…………御考えは変わらない様ですね……」

「ええ、折角の御好意ですが申し訳ありませんねえ」

「分かりました、出来るだけ貴方の御要望に沿える様に致しましょう。全く……やはり貴方は変な方ですねえ」

大天使の声は、そのものが天からの福音の様に神々しく辺りの空間に響き渡る。

「さてと粗方自分の要望は聞いて貰えるようですから、安心して新しい世界に旅立たせてもらいましょうか」

「まだ細かい所の説明やお伝えしなければならない事が多々有るのですが……」

「もう充分ですよ。それに……」

「それに……？」

「自分の新しい人生ですから、手探りで成長を感じていきたいじゃありませんか。だからこれで充分なんです、さあ、早くあちらの世界へと送つて下さい」

「やつぱり変ですよ、貴方……でも短い時間でしたが貴方とお話ししていく感じられた事は、今迄の遣り取りは実に貴方らしい……と言つ事でしょうか、それでは司馬田さん、今一度目を閉じて下さい」

「はい……」

「ゆづくつと氣を落ち着けて……はい」

不思議な事に尚志が田を閉じた途端に急速に尚志の意識は混沌して行き、まるで風呂にでも浸かっている様な感触に包まれる。大天使の声が徐々に聞こえなくなり、寄せては返す様な波の音に変わり自らに意識が完全に途絶える時

「将……太……愛……香……幸せ……に……」

それが現世での尚志の最後の言葉だった。

## プロローグ 4 旅立ち（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』 プロローグの最終回を書かせて頂きました。  
書きながら思ったのですが、オリ主と大天使の口調がモノの見事に  
被っちゃっていますねえ……（苦笑）

さて次回からやっと本編です。精一杯頑張って書きますのでどうか  
宜しくお願いします。

司馬懿 VS 曹孟德 前半戦（前書き）

どうも～ 隈落論です。

今回は試験的にオリ主田線つて奴で書いてみました。  
読み難い所も多々あるでしょうが一時でも楽しんで頂けたら幸いで  
す。

## 司馬懿　VS　曹孟德　前半戦

えへ、『司馬懿仲達の憂鬱』を読んで頂いた皆様、御久し振りです。故あつて恋姫の世界に転成致しました、司馬田尚志改めまして司馬懿仲達です。

何故いきなり私がメタな発言なのかと言いますとですねえ、実は、司馬家の長男として、この『恋姫』の世界に生を受けてから既に18年近くも経つちゃってるんですねえ……

ぶつちやけ幼少時の頃の事など本筋を進めるにあたって邪魔以外何者でもないですし、特に40ン才の思考を保つたまま我が母『司馬防』（恐らく私を生んだのは20歳になるかならないかの時期でしょうか……）の豊かな胸に顔を埋めて一心不乱に母乳を飲んでる姿など、一度と思い出しあたらない程のトラウマなんですねえ……しかし、母乳つてあんまり美味しいものでは無いんですねえ、あれをプレイにしている人達つて一体どういう人種なのでしょうか？

まあ、それはさておき……転生した先が『司馬家』だと理解した時には、「名字繋がりなのかつ！」とか「司馬懿だとしても登場時期が微妙……」とか思つたりもして此処は本当に『恋姫』の世界なのだろうかと色々疑いましたが、自分以外の『司馬の八達』が全て女性だと判別した時（末妹の司馬敏が生まれた時ですが……）に、やはり此処は『恋姫』の世界なのだと妙に納得したものでしたねえ。

取り敢えず此処に転生する前の御約束事であつた能力に関してですが、自分の要望通りの知力や魅力を与えてくれたようとして、司馬家の一男七女の中では博覧強記・才氣煥発とのお褒めの言葉を頂くほどであります、魅力の方もそこそこの様です。

が、しかし武の方に至つては末妹の司馬敏（現在8歳、本当に可愛いんですよこれが……）からも「兄上、もっと武芸に励まなければ御自分の身も護る事が出来ませぬ！」と、強烈な打ち込みを喰らうほどの体たらくなんですよ……トホホ

ああ、後、幼少時の思い出と言えば、あまりにも家族や使用人達に至るまでに厳格過ぎる両親に對して司馬朗姉上と一人で家庭内鬭争を試み、一年余りを掛けて、明るい家庭内環境と妹達の自由な人生を勝ち取った事ぐらいですかね……

えつ？ 当時の教育的な考えは儒教であつて親に反抗するのは駄目だろうつ？ まあ確かに両親に対する反抗など儒教での孝悌に於いてはとんでもない事なのでしょうが、それ以上に家族（司馬家で働いてくれている使用人達も広義では家族です）の間に厳格などと言つ己の力の誇示の様な壁を創る事に對して私は我慢が出来ませんでしたからね。

ただ勘違いして欲しく無いのは、私個人として儒教をこの時代の儒者の様に妄信していないと言うだけであつて、基本的に儒教は人の行動の原理ではあると思つているのですよ。最も儒学者なんてものには絶対になりたくは無いですがね……

まあそんなこんなで、この『恋姫』の世界に生を受けて18年近くまつたりと生きて來た訳ですが、先年の春に母上が洛陽での治書御史に任じられ一族郎党を引き連れて引っ越しをしてきた際に、姉上と私も半強制的に出仕する事になり、姉上は母上の手伝い、私は何故か母上の御友人で三公の司徒であられる袁隗様に気に入られ、袁隗様の秘書の様な仕事に付いております。

秘書と言つても公的な職務における秘書は朝廷から任じられている方がいらっしゃいますので、私の仕事は袁隗様のプライベートに関する事が主であり、どちらかと言えば袁隗様の政策立案であつたり、洛陽の都市計画の発案をしたりする事のほうが多いんですが……勿論正当な国からの賃金など出る筈も無く、私の給料は袁隗様の私費から出されているので元居た世界で言えば私設秘書兼ブレーンの様な扱いですかね。

「…………と、言つ訳で、以上、転生してから現在に至るまでの事情説明を終了させて頂きます」

「仲達……貴方、先程から私の問い合わせを無視して、誰に向かってブツブツと独り言を喋っているのかしら？」

「ここは宮中にある資料庫に隣接する閲覧室。私の様な下級官吏ですらない者が立ち入れる様な場所ではないのですが、上司である袁隗様の御好意で後漢建国以来の政治的資料を閲覧させて頂いています。先程から私に喋りかけて来ているのは誰あろう曹孟徳、真名は華琳。『恋姫』の世界では一番の有名人が私の眼前で腕を組んで座られています。」

何故に霸王曹孟徳の様な方が未だ一般庶民と大差ない私に話しかけているかといえば、猛徳さんが孝廉に推挙された折りに洛陽北部都尉に起用したというのが我が母であり、その縁から何かと親しくして貰っている訳なんですよ。

しかし妄想世界の住人であるとはいって、流石に曹孟徳です。ただ、座して話をしているだけなのに、この霸気に満ちた威圧感は反則だと思います。幼少の頃の我が母の質実剛健な威圧感もかなりなものでしたが、眼前の少女が発するそれも、勝るとも劣らぬものが感じられます。……唯一つ我が母と違う所は、まあ、母性の象徴である体の一部分が我が母と比べると慎ましやかで残念だと言つ所ですか……

「仲達……貴方、私を無視した上に失礼な事を考へているようだけれど……一回死んでみる?」

いやいや、孟徳さん、人の心の内まで読めるなんて貴女こそ一体何処までチートなんですか。それと危険ですから絶をこんな場所で突き付けないで下さい。確かに宮中には武器は持ち込めない筈なんじやなかつたでしようか? ……ハア～ツ、しじうがないですねえ、あまり調べ物の邪魔をされたくは無いんですがねえ。

「私は別に孟徳さんを無視している訳じゃあありませんよ、必要最小限の返事はしているじゃありませんか。それに孟徳さんの所への仕官の話ならば、もう何度も断つている筈だと思いますが……」

「ええ、確かにもう何度目かも分からぬ程、悉く仲達には仕官の話を断られ続けているわね」

「でしょ?……いくら治書御史の息子だからと言つても、私の様な小物に何故そこまで拘るんでしょうかねえ?」

「仲達……貴方、自分の事を小物だなんて本気で思つてているのかしら?」

「ええ、思つてこますよ。私には袁家の様に誇れる様な家柄も官位もありませんし、孟徳さんの側に侍る元議さんや妙才さんの様な際立つた武など持ち合わせていませんし、多少の得意分野である知の方も実際に何かに使用したと言つ訳でもないのでねえ……」

「まあ良いわ、ならば仲達、貴方に一つ確かめたい事があるのだけれど、貴方、一応は司徒の袁隗様の書生と言つ事になつているのよね。でも実際の所はそれだけに留まらず政策立案や、この洛陽の区割にまで進言をしたつて言つのは本当かしら？」

「ああ、その事でしたら確かに先年の初夏の頃に袁隗様から直々に、気付いた事ががあればと言つ事でしたので差し出がましい真似とは思いましたが、私の考えを述べさせては頂きました。しかし進言などと言つ様な公式なモノでは無かつたですし、あれはただ単に私の能力試験の様なものだと記憶しているのですがねえ」

確かに袁隗様の御側に控える様になつて一月ほどたった時に、袁隗様から洛陽の都を見て感ずる所を申せとの御達しで意見書の様な物を提出はしましたが、あれから四季を巡つても洛陽の都は殆ど何も変わっていませんので意味は無かつたと思っていたのですが、……それがよりも孟徳さんは何故そんな事迄御存知なんでしょうか？

「その時に提出したのは、この竹簡の事なのかしら」

そう言ひと孟徳さんは、その残念な胸……ゲフンゲフン……いやいや懐から竹簡を取り出して私の方へと広げました。

「ああ、これですね。しかし袁隗様がお持ちの箒のものを、孟徳さんが何故持っているのでしょうか？ まあ最も何一つ政策や意見が取り上げられていない点を思えば、袁隗様の眼鏡に適わなかつたと

「言つ事でしょうが……」

まあどうせそのぐらいいの扱いでしょうと元々思つていましたから、別段気にも留めていなかつた竹簡を手に取つて見ると所々に朱筆で添削されている事に気付きました。

「仲達、私は人材を見極める田は、他の誰よりも有るつもりよ。その私が見ても貴方の政策は、今迄見て来た他の政策案のどれよりも具体的で理に適つていたわ。袁隗様も何度も貴方の意見を上奏しようとしていたのだけれど、その度に頭の堅い内朝の宦官達に握り潰されていたのよ」

「はあ、まあ中常侍のお歴々には御自身達の既得権の問題が絡んでますから、私の意見は、例え袁隗様が上奏されたとしても、まず取り上げられる事はないでしょうねえ」

何時の世にも改革と言つものには、それ以前の旧弊にしがみ付いて利益を得てゐる者達の反対がある事は理解していりますので別段憤る事では無いですね……言外にその意を含んで孟徳さんに返答したのですがその答え方が彼女の気に障つたらしくて、彼女は声を荒げて

「貴方はあれ程の件策案を握り潰されて悔しく無いのつ！　いえそんな事よりも、あの様な愚かな臣共を畏れ多くも靈帝陛下の御側近くに侍らせておく事に危機感を持たないのかしら」

「孟徳さん、ここは宮中ですよ。誰かが何処かで耳を欹ててゐるかもしない場所で、その様な物騒な事を言い出すのは感心しませんねえ」

「あら、私は誰に何を聞かれても一向に構う事はないわよ

「いやいや、私が……と、言つよりは袁隗様の御側に控えている私の立場が困るんですよ。」こんなことで帝を蔑にする様な話の一端に加担していたと言つ事になれば、私に目を掛けてくれている袁隗様の顔を潰す事になつてしましますから」

「私は、その袁隗様から貴方の事を頼まれてているのだけれど」

「はい、いつ……？」

孟徳さんから放たれた思いもよらない一言は私の思考を急停止させるだけでは無く間抜けな声をも口から出させました。

「袁隗様は、貴方は自分の手元に置いておくには余りにも宝の持ち腐れであつて決して貴方の為、延いてはこの国の為にはならないとかと言つて他の凡庸な者に貴方を預けても結果は同じ事。ならばいつそのこと私の下で貴方の才を自由に使わせてやって欲しいと仰られていたわよ」

「袁隗様が……私の才を自由に」と……」

「そうよ、司馬懿仲達。貴方の様な才ある者は、私の下でその類稀なる才を充分に發揮すべきだわ。幸いにもこの末には私は陳留刺史として任地に赴く事になるわ、貴方も知つての通り私の配下には春蘭や秋蘭の様にごく一部の者しか大任を果せる者がいない。内政を司る優れた文官は喉から手が出るほど欲しいのよ」

孟徳さんの霸気に溢れた力強い視線が、私の事を射抜くように見据えます。正直言つて、あの曹孟徳に必要とされている事実が私を逡巡させたのですが……

「孟徳さんは自らの折角の御誘いですが……」

「やはり、貴方はこの洛陽に残ると誓つのかしり?」

「はい、本当に申し訳ないのですが……」

「理由を聞かせて貰えるかしら、仲達」

「理由ですか？ そうですねえ……まず貴女の仰る人材不足の件ですが、これは貴女が陳留刺史になれば、その問題は解決すると思います。何故なら今後数年之内にこの国は未曾有の大危機に陥るでしょう。そうなれば在野にいる私よりも優れた人物は先を争つて貴女の元に馳せ参じる事になるでしょう」

「その根拠は？」

「まずはここ数年来の飢饉による食糧不足の所為で農民達はもとより一般庶民に至るまで現体制に対する不満で満ち満ちています。特定は出来ませんが今後各地で武装決起が頻発する事は火を見るより明らかです。一方朝廷側でも禁軍として派兵は行うでしょうが、それでも禁軍が勝利を掴めるのは最初の内だけでしょうね」

「それは何故かしら?」

「単純に言つて、数の暴力ですよ。現行の体制に改革が見受けられない限り、庶民の不満は天を衝くほどになつて生まれた土地を棄てても禁軍に抵抗を続けますよ。ならば数が膨れ上がりつて行くそれらの者に対して動員に限りがある禁軍、さてどちらが有利であると孟徳さんは御考えですか?」

「朝廷だとて無能の集まりでは無いわよ。各地の諸公に対しても禁勅を出して兵を動員するし、義勇軍だつて各州や郡で結成されるわよ」

「そうですね……その事こそが自分達の首を絞めている事にも気付かずには禁勅を乱発するでしょうね。禁勅を乱発した結果、各地の力を持った諸公達に結果的には大きな力……具体的に言えば軍事力と発言力を持たせると同時に朝廷の力の低下を諸公達に吹聴する事になるんですが、考えてみればまるほど馬鹿らしい話ですね。そもそも国家と言つものを自分達の独占物と勘違いしだす輩が帝の側に多いからこの様な事態に陥ろうとするんですよ。あくまでも国家と言つものは其処に暮らす国民たちの物であつて帝の所有物でも無いですし、ましてやごく一握りの特権階級の方達の物では絶対に無いのですから」

私の答えを孟徳さんは興味深そうに聞き入った後に含みのある笑顔で私に向かつて下さいました。

「先程、私が貴方に咎められた言葉より危険な思想を熱弁しているわよ、仲達。でも中々貴重な意見を聞く事が出来たわ……ところで貴方が言つていた有能な人物が私の下に集まると言つた訳をまだ説明して貰つていないのでけれど」

「そんな事、誰に問うても同じ答えが返つて来ると思いますがねえ……今後この大陸に数多の諸侯が玉石混淆して台頭して来ると思われますが、五年、いや十年後を考えれば大部分は淘汰され、生きて名を残す諸侯は五指に余るかと……在野の賢人や一騎当千の武人達は息を潜め事の推移を見守つているでしょう。その者達が最終的に誰を選ぶかなど考へるまでありますまいに……」

そう言つた私は孟徳さんの顔をじつと見つめました……いやあ本当に整つた綺麗な顔立ちですねえ。ついつい仕官の話を承諾してしまった。いそうなぐらい魅力的なお嬢さんですよ、貴女は……でも未だ北郷一刀君が何処に現れるかハツキリしない内に、私は貴女の所に仕官は出来ないんですよ。それに洛陽にはまだまだ私がやつておかねばならない大きな仕事が残っていますし、未だ私の待ち人が天水から上洛をしていませんのでね……

司馬懿 VS 曹孟徳 前半戦（後書き）

うーん、オリ主目線つて難しい……説明文なんか心の内の言葉なんかの区別がつけ難い……まだまだ勉強しないとなあ……

と、言つ訳で次回は後半戦です。もう少しだけでも上手く書ける様になれば良いな……堕落論でした。

司馬懿 VS 曹孟徳 後半戦（前書き）

どうも墮落論です。

リアルが多少忙しくて更新が遅れてしましましたが、『司馬懿仲達の憂鬱』を更新させて頂きました。

少しでも面白こと思つて頂ければ幸いです。

司馬懿　VS　曹孟德　後半戦

「どうしたの……？　私の顔に何か付いているかしら……？」

おっと……、孟徳さんの顔を見つめたままだった様ですね。おや？  
何故孟徳さんの顔が赤いのでしょうか？

「別に、何でも無いですよ」

「そうかしら？　それにしても、いつも眠たそうな貴方の眼が、今  
迄見た事もないくらい真剣だったわよ」

「眠たそうな目つてのも、随分な言い草ですねえ。出来たら思慮深  
い眼とか、愁いを帯びた眼差しどか言って貰いたいものなんですが  
……」

「はいはい、冗談はいいから、貴方は私の問いに真面目に答えなさ  
いな」

孟徳さんは、私の言い分を華麗にスルーした後に、呆れた様に顔を  
背け左手をヒラヒラさせて言いました……ムウ……私としてはかな  
り真面目に言った筈なのですがねえ。

「で、私の問い合わせ……って、まだ私に質問が御有りなんですか？」

「当たり前でしょう。先程貴方が答えた内容は、今後起こるであろ  
う事が切欠で、私の下に人材が集まつて来るなどと言つ眉唾もの  
話じやないの」

「眉唾ものとは失礼な……私はですねえ、現状に鑑みて、此処洛陽に集まつてくる情報を分析し実地見分が必要ならば、北は幽州から南は交州の地まで馬を飛ばしてまでも生きた情報を集めている訳なんですよ。そして、生きた情報を私自らが吟味に吟味を重ねたその上で導きだした答えが、先程、孟徳さんに御話しさせて頂いた話なんですよ」

「（そんなに息巻く様な事かしら……）分かつたわよ、分かつたら仲達、そんなに身を乗り出して来ないで頂戴。顔が近い、顔がつ！」

「ああ、私とした事が、これは失礼しました。しかし先程御話した事は決して眉唾ものの話ではございませんよ…………孟徳さん……今から話す事については他言無用に願いたいのですが」

私はそう言つと辺りを一度確認したうえで孟徳さんに向き直り、声を出来るだけ潜めて彼女に話しかけます。

「貴女も危惧されている様に、現在靈帝の側に侍る中常侍達の専横な振舞いにより富中は、まず内朝組と外朝組の政治闘争や禁軍軍部と文官との主導権の奪い合い、そして靈帝の後継者問題などの非常に根の深い、私に言わせれば馬鹿馬鹿しい事この上ない権力闘争が渦巻いております」

「ええ、確かにそうね」

「はい、富中の大半の馬鹿者共の愚かな権力闘争の所為で洛陽ですから民達の心の安寧は図れずに、治安は悪化し、とてもではありますんが此処が帝のおわしあそばす地とは思えぬほどとなつております。都がこの様な状態では地方の様子などは言うまでもありますまい」

取り敢えずは私の話を聞いてくれてはいる孟徳さんですが、その顔には「今更何を言い出すのか……？」と言いいたげな表情がありありと浮かんでいますが、私はそれを無視して話を続けます。

「恐らく、早くて1～2年……遅くとも3年の間には其々の地方で燃り続けている火種が大きな炎となり、その炎を上手く操れる様な人物を頭目に据えて、この国全土を炎で覆いつくす事でしょう。残念ながら今更これを朝廷の力で防ぐ事は敵いません。しかし朝廷単体の力では各地で頻発する騒乱の対処は出来ずとも、州を治める有力諸侯達は恐らく自分の領地内での騒乱は鎮圧する事が出来るでしょう」

「仲達……一体貴方は何が言いたいのかしら？　私は回りくどい言い方は嫌いなのよ」

「まあ簡単に言えば恐らくはこの騒乱によつて靈帝の威光、いや、漢の国の威光は地に墮ちるでしょう……そして漢と言う國、延いては國を統治するべき帝の斜陽を嘲笑うが如くに各地の諸侯達が口の出の勢いの如く台頭して来るでしょう……その後は坂道を転がり落ちる様に血で血を洗う乱世に向かつて一直線つて所でしょうか」

「仲達！　貴方自分が何を言つてゐるのか分かつてゐるの？」

ほづ、やはり後の霸王曹孟徳とはいえ、現段階では私の言は不敬に思われるのですねえ。先程までの表情が一変して、私の事を得体の知らない者を見る様な眼で見られていますし、その視線にも私を咎める色が濃いですねえ。

「ええ、今自分が孟徳さんに申し上げた事の重大さや不穏な言葉の

数々などの全て理解したうえで私は、曹孟徳と御話をしているのですよ」

「仲達……貴方……」

「現状ではこの数年の間に事実上漢と言つ国は有名無実の国となります。その後に恐らくは新しき国の霸権を懸けての大きな戦が始まることを避ける事は出来ません。私はその霸権を懸けて戦う諸侯の中では、孟徳さん、貴女が最も『霸王』の位置に近い方だと思つていいのですがね……」

「私が……霸王……」

「そうですよ、まあ、貴女以外では汝南袁氏の袁紹様に袁術様、今は袁術様の配下におられます、長紗の太守であつた今は亡き孫堅様の後を御継ぎになられた孫策様、荊州の劉表殿、涼州の馬騰様、それに西涼に駐屯されている河東太守の董卓様ぐらいまでが時代の英雄、英傑たる資格をお持ちの方々だと私は考えますが……まあもつとも今、私が名を挙げた方々全員にその気があるかないかは別問題ですがね」

私は会話を一旦止めてから、息を整えて再度話します。

「要するに現時点において、やれ太守とか將軍だなどと言つている有象無象の無能な輩は、今から来る激動の時代に殆どの者が対応出来ないか、対応出来たとしてもあまりの無力さに力ある者に膝を屈するしか道が残されていないのですよ……如何ですか？ これでもまだ私の言う事が貴女にとつて眉唾ものの話ですか？」

孟徳さんは私が話しありた後、暫くの間腕を組んで考え方をしてお

られましたが、何事かを決意したかのよつた顔で私に問われました

「仲達、貴方は、この曹孟徳が畏れ多くも帝を差し置いていざれこの国に霸を唱える者だと言つのかしら?」

「さて……? 私はこの国の誰よりも孟徳さんに『霸王』の資質や資格があると言つただけで、今後、孟徳さんが貴女自身の霸道を行くのか、或いは帝を助けて今一度漢と言つ国を盛り上げるのかなどと言つ遠い未来の事などは巷で噂になつてゐる菅輶とか言つ占い師でもなければ分かりませんよ」

私がそつ言い終わり読みかけの資料を閉じて席を立とうとすると

「お待ちなさいな、仲達」

「えええ……まだ何か質問がおありなんですかあつ……」

「なんで貴方は私の問い掛けにいちいち面倒そうな顔をするのかしら? 春蘭や秋蘭なら私が声をかければ、それこそ大輪の花が開いた様な明るさで応えるのに……」

「あの御一方と私を比べるのは如何なものかと思いますけど……で、御質問とは? 私この後袁隗様の元に伺わなければならぬので出来ましたらお早目に願いたいのですが……」

「そつ手間は取らせないわよ。先程の話で貴方が現在の状況をどう捉えているかは良く分かつたわ、でも、それだけでは貴方が私への仕官を断り続けている理由にはならないわよ。聞けば貴方、麗羽の所の仕官も断り続けているそうじやない。何故そこまで頑なに仕官を拒否するのかしら? それとも何か他に貴方自身が遺るべき事で

もあるのかしりつ。」

ああ、そう言えば本初さんの所の顔良さんから何度も御誘いを受けましたね、あの顔良さんの良妻賢母で苦労人つて所は、私のタイプなんですがねえ、の方とだつたら幸せな家庭が築けそ……ゲフンゲフン……いやいや、しかし残念ながら、本初さんの所に仕官つてのはちよつとねえ……

「まだ、その話を引つ張りますか……」

「当たり前でしょ、貴方のその智勇を田の前にして、そう簡単に諦める程、この曹孟徳、愚者では無いわ。貴方が仕官をしない理由をハッキリと聞き紹すまで私は貴方の事を諦めないわよ」

そつ言い放つて此方を見つめる孟徳さんの田は間違いなく捕食者の目です。いい加減な言い逃れは許さないと、言つ意志がビンビンと此方に伝わつて来ますねえ。うーん、面倒臭いですねえ……でも中途半端な事を言つたで、孟徳さんは諦めないでしょしねえ……取り敢えずこの場は私の考えの中でも一番危険そうな考え方でも話してやり過いしましょつか。

「私の遣りたい事ですか……？　そうですねえ確かに色々な仕官を断り続けている理由は私自身が目標とする事がある為なんですが……」

…

「それは私の下では叶えられない事なのかしら？」

「うーん……孟徳さんの下で、と言つよりも誰の下でも無理なんじやないですかねえ、私の目標を理解して頂くと言つ望みを叶えるのは……」

転生してから20年弱、ずっと考えて来た事を思い返しても、自分の考えがこの時代には非常にそぐわない考え方であり、この考えに賛同してくれる様な人達も見当たらないまま今に至っている訳なのでですから、もしも、この考えを実行に移すならば、これはもう自分一人で遣つて行かなければならないのであるうと思つていいだけなんですがね。

「私はね、帝を頂点としたこの国の在り方を変えたいのですよ」

「仲達、貴方正氣かしら?」

「ええ、充分正氣ですよ。私は現在の様な民に何の徳も益も齎さない帝を頂点とした制度など全く必要無いと思つています。そしてその帝に対して盲目的な忠誠を誓つ事が臣下の礼と考えている者達や、己の既得権を最優先させるが為に帝の力を利用している富中の者達も必要ありません。国とはその様な愚か者達の為にあるのではなく、その国の民達の為に存在するものでなければならぬと私は考えます。私にとっては國の民一人一人が希望を持つて暮らして行ける世の中を造る事が、馬鹿馬鹿しい霸権争いをするよりか余程重要な事なんですよ」

孟徳さんは目を見開いたまま、私の方を見て固まっています。

「具体的に言えば、国政は有力諸侯の中から入れ札で国を纏める者を選び、便宜上それを首相とでも呼びましょうか……その首相と各州の代表との合議制で運営して行くのが理想と考えます。一方で帝は政治には全く関わらずに、國家鎮護の為の祭祀を取り仕切り民の為の祈りを捧げていただきます。この考えの肝心な所は首相の任命権や合議制の閣議決定で出来た法令などの批准権は帝にあると言

う事で、これを持つて帝は『君臨すれども統治せざ』の状態になり政治の実権は有力諸侯による合議制に委ねられます。勿論この様な案が最終決定では無く、あくまでも私の思案ではあります、概ねこれが私の目指して行きたい目標です」

私の考えは転生前の私が生きていた日本での天皇制と議会制に倣っています。最も日本でも糺余曲折を経て現行の状態となつていった訳ですが……

「如何ですか……？　この様な危険極まりない思想を持ち、飼いならす事が難しい厄介な者と知つてまで貴女は私を幕下に欲しがりますか？　貴女にとつて獅子身中の虫になる可能性が高い者を身近に置けますか？」

「そ、それは……」

「先程迄と違つて言い淀んだと言う事は、私を仕官させる事を躊躇した……と、言う事と考へて宜しいですね。妥当な判断です。では、私はこれにて失礼いたします」

私は不本意ではありますが、孟徳さんが見せた一瞬の隙を突いて、畳み掛ける様に言葉を紡いで席を立ち閲覧室を退出しようとした。

「お待ちなさいつー！」

しかし、情けない事に孟徳さんの一喝で、私の足は持ち主の意志に全く関係なく一步も動けなくなつてしましました……日本の戦国の世に武道の達人が使つたつていう不動金縛りの術つて、術に掛かるところな感じなんですかねえ……いやいやそんな悠長な事考えてい

る場合、じやああつませんね。

「仲達、今言つた事は、貴方の本心なのかしら？ 貴方程の者が、到底実現不可能な妄想に近い考えを持つ筈がないわ。確かに今言った事も貴方の考えた案の一つでしうけれど、貴方の眞の目標はもつと別にあるのではなくて？」

ちいつ、流石は霸王曹孟徳ですね。一瞬にして私の考え方を見抜きましたか……しかし、この方一体何処までチートなんでしょうねえ……一度この方の正式なパラメーターを拝見したいものですね。まあ、馬鹿な事考える前に、さて一体どうやってこの難局を切り抜けましょつかねえ……

「流石は孟徳さんですねえ……私如きの苦し紛れの策では、貴女の事を謀る事は出来ませんか……」

そう言いながら、私は孟徳さんの側に立ちます。身長が現代で言う所の180cm弱の私が、腰掛けている孟徳さんを見下ろす様な形になつてゐる事が心苦しいのですが、背に腹は代えられませんので此処は一つ不躾を許して貰つて、失礼な事を承知の上で孟徳さんの顔を見つめます。

「私の事を謀るうなんて、百年早いわよ」

あのお、孟徳さん、その言い回しは、この後漢の時代ではどうなんでしょうって感じなんですかれど……まあそんな事はどうでも良い事ですね。

「どうしたのかしら急に黙り込んで？」

あつ、また孟徳さんの田が捕食者の田になりましたね……「へん、この様な手段はあまり使いたくなかったのですが……」

「いやあ、参りました……しかし、いつやつて孟徳さんと話をしていると、如何に貴女が魅力的なお嬢さんであるかと言つ事を再度認識させられますねえ……」

「なつ、こきなり何を言つてこるのかしら、貴方はつ！」

「おやおや、こきなり顔を真っ赤にしてワタワタとするなんて、なんて新鮮な孟徳さんなんでしょう……」

「いえいえ、この司馬懿仲達。感じた事をそのまま申しただけで他意は御座こませんよ」

「あ、貴方、熱でもあるんじやないのかしら？ 急に何の脈絡も無い様な事を言い出すなんて」

「ん~どちらかと言えば熱があるのは、首筋辺りまで真っ赤に染まつた貴方の方ではないかと私は思つのですがねえ……」

「これは曹孟徳ともあうつ御方が異な事を仰る。魅力的なものを魅力的、綺麗なものを綺麗、素晴らしいものを素晴らしいと素直に口にした私の言を疑われるとは……それに素晴らしいとかの贅沢は孟徳さんならば聞き慣れているでしょ？」

「聞き慣れているとかいとかの問題ではなくて、何故、貴方みたいな朴念仁がいきなりそんな事を言い出すのかと言つ事よつ！！」

あれつ？ 孟徳さんの中での私の評価つて朴念仁なんですか？ そ

そもそも朴念仁って和製漢語ですよ。何でそんな単語貴女が知っているんですか？　いやいやそんな事よりも私ってそんなに……え？

「貴女一体私の事をどう見ていたのでしょうか？」

「朴念仁には朴念仁なりの鬱屈した愛情表現と言つものがあるのですよ、孟徳さん。それに貴女は、女性としての魅力は勿論の事、成熟した人としての魅力をも持ち合わせていますよ。たまには元譲殿や妙才殿だけでは無く私の事も闇にお誘いくだされば……」

「なつ、なつ、何を……闇になんて……」

私の思いもかけぬ言動によつて、眞い具合に孟徳さんの霸氣が散り、またもや隙が出来ました。逃げるならば今ですね。

「と、言つ訳で、とつても魅力的な孟徳さんには申し訳ないのでが……私の様な朴念仁では孟徳さんの無聊をなぐさめる事は出来かねますので、これで失礼しまーす」

三十六計逃げるにしがず、私は脱兎のごとく閲覧室を逃げ出しました。こう見ても私、武は全く駄目ですが逃げ脚だけは『司馬のハ達』の中で一番速いんですよ。

「待ちなさいっ！　司馬懿仲達！！　私は絶対に貴方を仕官させる事を諦めないわよっ！！！」

遙か遠くの方で、何か恐ろしい孟徳さんの怒声が聞こえて来た様な気がしましたが

「ああ、聞こえない、聞こえない。私には何も聞こえない」

私はそう言しながら富中の長い廊下を、両耳を塞がれ、頭を振りながら逃げて行きました。

## 司馬懿 VS 曹孟德 後半戦（後書き）

いつも長い間お待たせしました『司馬懿仲達の憂鬱』 VS 曹孟徳 後半戦を書かせて頂きました。

先週の土曜日曜と二日間私用で京都に行っていたのですが、土曜に京都駅に着いて、あまりの警備の物々しさに「やつぱ都會つて凄え！」等と馬鹿な事を思つていたら、その日は、あの一躍時の人となつていたブーナン国王夫妻と皇太子殿下が京都にいらっしゃる予定だったとの事でした（苦笑）

そりゃあ、國賓と皇族が御出でになるならあのぐらいにもなるわさ（笑）

まあそんなこんなで京都の友人の所に一泊二日で滞在した訳ですが結局観光は一切せずに立ち寄った場所は「とらの な」と、「ロングブックス」と、「ゲマ」と言う見事なまでのミタライフ……

だってオイラの住んでる所には全部無いんだもんっ……まあこの二日間で充分エロ成分も補充出来た事だし今後も頑張って行きたいと思ひますので皆様宜しくお願ひ致します。

尚、次回更新は11／30（水）の予定です。

それでは次回の講釈で……墮落論でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2154y/>

---

司馬懿仲達の憂鬱

2011年11月23日18時52分発行